



森有正先生と僕

伊藤勝彦著

新曜社・2730円

「森有正先生と僕」という表題がいい。著者は、大学1年のときに出会った温容で、気取らない人柄にひかれて、「先生に熱中するようになってしまった」という。当時、森有正は東大仏文科助教授。教室ではデカルトを講義し、間もなく給費留学生として渡仏する。

そうして27年、「森有正はなぜかフランスにいつづけた」。一時帰国した森に17年ぶりに再会を果たした著者は、同じ研究の道を歩む人になっていた。著者は森の「僕は小さい時から、自分が遙（はる）か彼方（かなた）へ行くことを夢みていた」という文章を引きながら、それは「旧貴族」の家に育った森自身の幼年時から、さまざまに続けた魂がそうさせるのだという。

森有正は、初代文部大臣森有礼を祖父に持ち、父・明は牧師。母は徳川本家から嫁している。そのような生家の窓の夕焼けの空の中に見た「一本の樫（かし）」

生涯賭け経験の哲学を探究

の木」こそ、（その心の向かう海の向こう）遙か彼方にあるものの象徴であったと森有正は記す。

著者にはたいへん不本意だろうが、デカルト、パスカル研究者としての森有正や著者の深い思索に近づくには到底及ばない私は、本書を「先生と僕」という美しく、そして少し切ない「物語」として読んだ。随所に引用される森のエッセーは、もう一度自分の手にして、「（バビロンの）川の流れ」の中に森有正の姿を追うことになるだろう。

森有正は熱心なキリスト者としての信仰を持ち、パッハを弾いた。大勢の人から帰国を待たれながら、パリの地で客死するまでついに帰ってこなかった森の名は私に、その死を深く惜しむ牧師・加藤常昭によって初めて刻まれた。「自分自身の生活と経験に深く根ざす言葉以外は無意味だ」という自らに課す厳しさの中で、「自分の全生涯を賭けて、真摯（しんし）に経験

の哲学を探究しつづけた」

森有正、その人の像は本書によって一層膨らむことになった。（詩人・西村博美）

